

残そう、自然の宝石箱・のりくら

# くらがね通信

No.54 (秋号)

乗鞍岳と飛騨の自然を考える会

平成 25 年 11 月 1 日発行

## 『乗鞍岳自然観察会』 (8月3日・参加者16名)

### 耐える強さから生まれた可憐な美

坂下 行雄

雲海に浮かぶ、飛騨山脈の島々の中でひとときわ天空に突き刺さっているのは槍であった。媚びたような秀麗だけで、世界遺産に登録された富士とは異なる、身の引き締まるような厳しさに視線は釘づけとなる。下界で心配していた乗鞍岳の天気は、すでに巻雲を薄く流して、夏から秋へと一気に誘い込んでいた。

透き通った空気が、父のような力強い岳の輪郭をくっきりとさせ、おふくろの懐のようなやさしく大きな自然の庭を囲い込んでいた。ハイマツの縁が庭に下り尽きた辺りから、所々に庭石が転がり、青い池が広がり、雪解け水の滝が流れ、お花がそれらをアクセントにあちこちに広がっていた。雷鳥は姿を見せなかったが、イワツバメ、ホシガラスが喜びの鋭い声を上げていた。

遊歩道の足元には、長い風雪に耐えてきたにもかかわらず、今を盛りの可憐な花が、松崎さん(リーダー)をはじめ、会員みなさんの、花を愛する人たちの、思いやりのある解説によって引き立ってきた。案内されずに歩いたら、小さいが確かな花の形をし、その機能をそれなりに生きながらえた可憐な命を見逃していただろう。

どれも同じ黄色い花と思い、「あっ、黄色い花か！」と、全てが分かったような気になって、それ以上には見向きもしなかったに違いない。日立たない小さな花に目をやる心も学ぶことが出来た。

厳寒の冬を耐えてきた逞しさや苦痛などどこ吹く風の、その優しさに、人間の世界でも苦しんで生きた人間ほど他人に優しい人と思いながら励まされる。

林芙美子は「花の命は短くて、苦しきことのみ多かりき」と書いていたが、林のロマンを抜きにして、この高山の花こそ、厳しい現実には耐えてきたその思いにピッタリであると思った。

分かり易く、何回も繰り返して説明をしてくださるので、僕は頭で受け止めるのが苦手で、馬耳東風であったが、思い知らされたことがいくつかあった。(間違っているかもしれないが)

\* 黄色い小さな花は、僕にはみんな同じように見えたが、その違いの見分け方を教えられ、何といい加減な



S・佐藤

見方で、すべて「黄色くて小さい花」で済ませてきてしまったことか。「ミヤマキンポウゲ」「ミヤマキンパイ」「ミヤマダイコンソウ」など、僕にはすべて黄色い小さな花であった。

\* 黒百合の花では、スカートを捲って中を覗き込むと、両性花と雄花の二種類あることを教えられる。こんな見分け方もあるのかとビックリする。「黒百合は恋の花」の歌からエッチな連想をしたのではない。

\* 相当に気を付けていても目に

触れなかったであろう「ウメバチソウ」。毎日一個の梅を食べ、僕流の風邪薬にしているので、こんな所に、地に這うように咲いているけなげさに、頬ずりしたいような感動を覚えた。

これらの小さな花の存在を僕は無視していたというより気付かなかった。目立たない花に目を行き届かせてもらえたこの「美」こそ、弱い立場の庶民の「声」で、声高に「美しい日本を取り戻す」などと言いながら、富士の麓を、自衛隊と米軍の演習地にして膨大な自然を破壊している安倍首相に観てもらいたい。

その点から言えば、飛騨山脈こそ世界遺産である。僕は学術的には何とも言えないが、日本の自然を守る決意のためにも飛騨山脈を世界遺産にしてほしい。登山者を招くための遺産でなく、自然に寄りかかり、共生して生きていけない限り、人間はいつか滅びる。やがて問題が予測される富士山なんかより、この乗鞍の花畑を眺めて欲しい。そうすれば、国防軍を創設するなど、他国と争う気持ちなど吹き飛んでしまう。



S・佐藤

富士山がどんな基準で世界遺産に選ばれたとしても、高山から見る笠ヶ岳の秀麗こそ日本一だと思う。何故なら日本民族の大本である稲作農耕の指標の自然の暦となる「雪解けの馬型」があるからである。自然の動きとともに歩んできた人々にとって最も価値ある世界遺産である。

山の人々も美しかった。親子連れの幼児が小さなリュックを背負って一人前の装備で軽く歩いている。こうして子どもの自然に親しむ姿は頼もしい。携帯を花の撮影に使っていたが、それ以外の電波に心を預けている若者はいなかった。山を愛している人々である。これもうれしかった。

岳の山腹から庭を眺めながら昼食を採る。蝶があっという間に飛び去っていく。

見下ろす庭へ、隣の岳の脇から吹き上がってきたガスがいきなり襲いかかってくる。うっとりとなあたりの美に見とれている気持ちをさっと打ち消すように、「お前は甘すぎるぞ」と、警告してくれたようであるがやがて消えていった。



張りつめた糸電話でも地球の裏側まで届きそうな紺碧の空の下、乗鞍は幾つかの岳の峰を集めて、庭を囲い込み、花畑に池を添えて夢の世界を広げ、自然を自然のままに誇っていた。虚飾のない世界は人間を裸にする。人間を人間らしくする。

周囲の岳も、花の名前にも疎く、ただ美しいと思うだけであったが、自然の育む「美」の中に、「自然の生命力」を発見する自然観察会となった。

(写真 S・佐藤八重子)

# アサギマダラマーキング会 (9月1日・参加者14名)

当会の秋の恒例行事「アサギマダラマーキング会」を開催し、32頭にマークをして再捕獲を期待して放蝶しました。

## マーキング調査に参加して・・・ (北小学校・住 文乃)

私は今年で4回目の参加です。ふだんも家の近くでチョウチョをつかまえて遊んでいるので、小学校2年生の時、お父さんについて参加しました。おとしマーキングしたアサギマダラが三重県と奄美大島近くの喜界島で再ほかくされて、とてもうれしくておどろきました。

ことは雨とかであまりマーキングできなかったけど、1頭だけでしたが一発でつかまえたので良かったです。自分でとったのではないのも合わせて5頭にマーキングできました。どのアサギマダラも元気に飛んで行ってほしいと思って放しましたが、そのなかのどれでもいいのでまたどこかでつかまえてほしいです。



それと初めてオコジヨを見れたのでうれしかったです。

10月2日、待望のメールが入りました。

### 《SGD 9/1 ヤマ1》再捕獲しました!!

マーキングされたのは山田美穂さん。9月30日石川県宝達志水町宝達山で再捕獲。能登半島の付け根辺りにある標高637mの場所でした。再捕獲後「ほうだつ 9/30 かふう 68」と追記して再度放蝶されたとの事。北西へ110km、移動したことがわかりました。

山田美穂さんは昨年初めてマーキング会に参加され、そのとき放蝶したのが長野県で再捕獲され、2年続けて再捕獲の記録をされた方でした。しかも放蝶した場所より北への移動となっています。この時期のアサギマダラは南へ向かうのが普通でしたが反対へ向かっています。以前に御嶽山より北へ向かい富山県宇奈月で再捕獲されたのもいました。長年福島県を中心にアサギマダラを研究している方が「8月生まれの個体の中には北上して戻ってこない個体もあるのではないかとコメントされています。(春の北上個体が、秋に南下した例もあります) どのようなのでしょうか? 今後のマーキングによって判明するかもしれません。

ところで、「・・・ヤマ1」を再捕獲された方は、山田さんと同じで昨年初めてマーキングに参加して、その時の個体が和歌山県で再捕獲されアサギの魅力に取り付かれたそうです。そして今回御自身が再捕獲。益々のめり込まれてゆく事でしょうね。

公開講座・自然談話室のお知らせ (今年最終行事となります)

日時：11月15日(金) 夜7時より 場所：高山市民文化会館

## 『北方タイガの森とモンゴル草原を訪ねて』

お話：小野木 三郎 (本会副会長)

## 平成25年度 乗鞍フォーラム

乗鞍の地域振興と環境保全について市民とともに考える『乗鞍フォーラム』が開催されます。今回は、事前に丹生川、上宝、市街地の3地区で座談会を開催し、市民から乗鞍に対する意見を広く収集し、その結果を基に乗鞍フォーラムにおいて意見を交換します。

期 日：平成25年12月14日(土) 13:30~16:00

場 所：高山市役所 地下市民ホール 一般市民参加無料

内 容：これまでの乗鞍フォーラムや協議会の事業の内容。高山西高校生徒による発表。

意見交換など。

(事前申し込み不要。詳しくは『広報たかやま』10/1号)

### 環境講演会 『エゾライチョウについて』(要旨)

藤巻 裕蔵 氏 (日本オシドリ协会会长・帯広畜産大学名誉教授)

世界にはライチョウ類は17種いる。その生息環境により、森林性・ツンドラ性・草原性とおおきく3つにわけることが出来る。日本に生息するライチョウはツンドラ性で、北海道に生息するエゾライチョウは森林性である。

#### ■エゾライチョウ

日本アルプスにいるライチョウは約600グラム、エゾライチョウが400グラムと、ライチョウの中ではエゾライチョウが一番小さい。ライチョウは夏と冬で色が変わるが、エゾライチョウは羽毛は変わるが色はほとんど変わらない。

エゾライチョウの分布はユーラシア大陸とサハリン、北海道にいる。北海道のエゾライチョウはDNAの分析からすると大陸から約4万年前に渡ってきたと考えられる。氷河時代に千島列島と繋がっていたはずなのだが、南千島、クナシリ、択捉にはいない。理由は分からない。ライチョウもほぼ同じ時期に渡ってきたと言われている。もしサハリン・北海道経由で本州に入ってきたのなら、北海道にいてもいいはずだが北海道にはいない。これも不思議である。信州大学の中村先生は、「北海道に入ったが絶滅した」と言われている。大体は常緑の針葉樹林帯と針広混交林・落葉広葉樹林にいて、南の方にはいない。南の地域はキジの仲間が多く、エゾライチョウが入ってきた頃には分布を広げていた。キジとライチョウでは生態が違うが、同じキジ科のグループであり、競争でライチョウは南には入れなかったというのが一つの考え方である。

北海道におけるエゾライチョウの分布を見ると、森林性であることが分かる。棲息環境はハイマツ帯は一か所、常緑針葉樹、針広混交林、落葉広葉樹林に多く棲息している。カラマツ林には全くいない。カラマツは植樹したもので、北海道には自生の物は無く、北海道にもともと無い林には棲息しない。

1年の周期は4月につがいになり、5月上旬から中旬にかけて卵を産み6月中旬に雛がかえる。6月中旬ころから、孵化した雛を連れた家族が見られる。雄は雌が抱卵すると全く関心せず単独になり、8月中旬ころまで続く。その頃になると雛も親と同じくらい大きくなり区別がつかなくなり、其のころから家族群が崩壊し単独行動をとる。秋から冬にかけては数羽から10、20羽の群れになって冬を越す。3月中旬ころから雄は縄張りを作り又つがいとなる。

エゾライチョウの卵は平均7個位で倒木の影や木の根元に巣を作る。巣の作り始めはほとんど巢



に巣材はなくくぼ地にすこし枯れ葉を敷いた位だが、産卵を進めるうちにどんどん枯れ葉を集めて敷きつめていく。卵は1日目に産んで1日おいて2日目に産む。平均すると1・5日に1卵、小鳥のように毎日1個ずつ産むことはない。抱卵している時近づいても全く気付かず、巣に対する執着心がある。飼育している時に抱卵している雌をつかんで卵を調べてまた雌をのせてもそのまま抱卵を続ける。

完全抱卵が始まって23日目に孵化する。孵化寸前になると巣を離れない。孵化1日前になると中で雛が声を出すようになるため、親の執着心が強くなって離れないのではと思われる。その間何も食べないで卵を抱く。半日で孵化する場合もあるし、長くて1・5日かかる場合もある。成長については、足は非常に早く親の大きさになる。翼は大体10日目くらいで飛べる。天敵が来ると雛は全く動かないが、飛べるようになると飛んで逃げる。食食物は、冬は落葉広葉樹の芽、シラカバの花穂。自分の体重の5パーセント位の重量を食べることもある。春になるとタンポポ・クローバーなどの葉を食べ、秋になるとブドウ・コクワ・カタバミ等を食べる。幼鳥の頃は昆虫をよく食べ、春先は木の葉をよく食べる。

冬は足の部分の毛が長くなる。足の指には毛が生えていないが、櫛の歯のような角質の突起がある。カンジキをはいたような感じで、冬になると少し大きくなる。雪の上でも歩ける工夫である。積雪が30センチくらいになると、雪の中にもぐって寝る。ライチョウは自分で掘ってもぐっていくが、エゾライチョウの場合は木の枝から雪の中に落ちるようにつつまんでいく。雪に入ると外気がマイナス30度位になっても、±0度前後。ライチョウは温熱動物なので自分で体温を出すため雪堂の中はプラスの温度になる。翌日穴の中から出てくる。

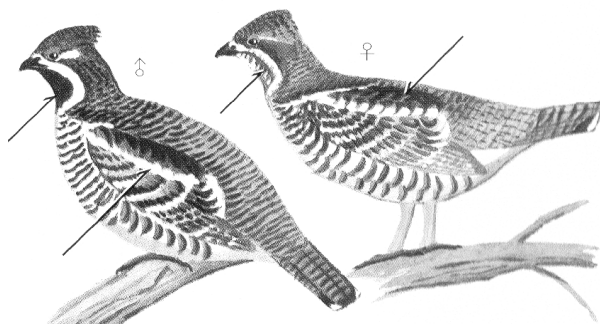
環境省が1978年に行った調査結果と1998年の調査を見ると明らかにエゾライチョウが減少しているのが分かる。生息数減少の要因として、棲息環境の変化・狩猟・捕食者が考えられる。

1980年代から90年代にかけて減少してそれが続いているが、北海道の森林の状況はそれほど変わっていないので、その影響はあまり問題はないと思う。もうひとつは最近シカの立ち木への食害が増えており、エゾライチョウの冬の食料は100%落葉広葉樹に依存しているので、それが枯れると言うことはエゾライチョウにとって問題となる。森林の状況は変わっていないとは言っても環境の変化が影響している。

狩猟シーズンにハンターがどこでどんな獲物をどれくらい獲ったかを報告するが、それによるとエゾライチョウは捕獲によって減ってしまうほどの数が獲られているわけではない。関係は有るかもしれないが主原因ではない。

捕食者のキツネであるが、ハンターの捕獲数を見ると、キツネは寄生虫を持っていて積極的にハンターはとらないが、有害鳥獣駆除で報告されたデータで見ると1970年代から増えている。1960年代の末から乳牛の飼育数が急激に増え、子牛を産んだ後の後産を捨てていた。それをキツネが食べ、キツネが増える要因となったと思われる。キツネの増加に伴ってエゾライチョウが減っていく。私はこれが減少の一番の原因ではないかと考えている。それに対して行政指導で、後産の始末をしっかりとるようになった。1999年から北海道のキツネの間で疥癬が流行り死亡する個体が増え数が減った。キツネの数が減った後エゾライチョウが回復した。

1980年代と90年代の幼鳥の数を調べると、90年代では減っている。これからキツネは幼鳥をとって食べていると思われる。エゾライチョウは3月に卵を産んで5月上旬に縄張りを持ちよく



フィールドガイド『日本の野鳥』(日本野鳥の会)より

鳴く。笛で雄の鳴き声をまねると雄がそれに答えるのでハンターはそれを獲る。9月～10月に縄張りを持つ。春の縄張りは繁殖の為だが、秋の縄張りはえさ場の確保の為とも言われている。

## ■ライチョウ

ライチョウは2002年では絶滅危惧Ⅱ類だったが、昨年さらに見直され絶滅危惧Ⅰ類となった。日本のライチョウは約3000羽であったが、最近は数が減っている。北アルプスと南アルプスでは別の個体群で、南アルプスの個体群が危機的な状況にある。また高山帯にシカが上がってきて棲息環境が脅かされている。

現在絶滅の恐れがある種類については国が保護増殖事業を行っている。現在はトキ・コウノトリ等14種類いる。これに今度ライチョウが対象になった。保護増殖事業は1993年に出来た「種の保存法」に基づいている。まず保護増殖計画を作る。ライチョウについてはライチョウの委員会があり、その中にライチョウについての分科会ができた。今年一回目の分科会が開催されまだ準備期ではあるが、25年度になってしっかりと事業計画を決めることになっている。事業者は環境省。森林管理局・農水省等も入るかもしれない。

事業の目標、区域(日本アルプス・北アルプス・南アルプス・新潟県など)、事業内容は生息状況の把握(モニタリング)・棲息環境の整備などでこれから決まっていく。

これは増殖事業で行う基本的な事を決めるだけで、具体的に何をやるかということを決めることはない。アクションプランを作りその中で5年、10年と言う年度を区切って行動計画を作る。

シマフクロウを例にすると、1993年以前から主に給餌と巣箱を掛ける保護事業が始まっていた。1993年に事業計画ができて、1999年に具体的に何をやるかという計画を作った。2007年には基本的方針が決まり、これに基づいて2011年に具体的な計画を作った。去年生息地拡大にむけて行っている。現状ではシマフクロウが棲息する環境がほとんどなく、環境整備が必要であろう。事業者は環境省と、日本のシマフクロウが棲息しているのは国有林であるので、今回は北海道森林管理局が積極的に力を入れてくれるようになった。

実施に当たっての今後の問題は事業者・研究者・保護団体・ボランティア等の連携が必要で、常時交流することが大切である。研究者は調査をするのだが、ライチョウは高山帯にいたので、登山出来る人が必要になってくる。そういった人材を養成することが必要になってくる。

飼育比率の確立については、増やした個体を再び野外に放す事を目的とした技術を確立しなくてはならない。予算確保については、現在保護増殖事業に使われる予算は増えていないのに、対象が増えている。つまり一種あたりの予算がどんどん減っている。国の予算以外に資金を作らないとうまくいかないと思われる。

次に野外に放せる個体をしっかり育てることが最低限度必要である。ライチョウの仲間には餌なれ現象があり、野外から捕獲してきたライチョウに人工的な餌を与えても中々食べない。逆に人工状況下で育てたものは野外での餌は食べなくなる。現在ライチョウ飼育は野外の餌以外のものを与えて飼育している。こういった状況は人工状況下で数を増やしていただけないのだが、野外へ放すとするなら、そういった個体は放鳥には向かない。エゾライチョウは人工飼料で飼育したものはシラカバの花穂などを与えても必要量を食べない。つまり野外では生きていけない。つまり餌慣れを解決しないといくら増やしても野外へは放せない。

エゾライチョウの人工増殖について、野外から卵をとってきて人工孵化すると雛が人間になれてしまい、雌が育てると雛は飛べないうちは天敵が現れると地面に伏せて動かない。安全になると動き出すという警戒本能がきちんと残っている。ところが人工孵化では天敵から逃れる行動をしない。野外への放鳥を考えるのであるなら、人慣れを起さない飼育方法を考えなくてはならない。

(2013・5・24 高山市民文化会館)



# 「ライチョウのケージ保護」視察

8月13日(火)快晴 参加者 6名

昨年、高山で開催された第13回ライチョウ会議岐阜大会(10月13日～15日)に於いて、中村浩志先生(信州大学名誉教授)からケージ(かご)でのライチョウ母子の保護によるライチョウ生息数増加計画(3年計画)が紹介された。

最終年に当たる今年7月に孵化したひなを3組の母子(3家族)として3基のケージで、ひなの生存率が最も低くなる孵化後1ヶ月間を保護した後、放鳥し、母子を自然に返す試みが行なわれた。

「乗鞍岳と飛騨の自然を考える会」の会員6名で8月13日に「ライチョウのケージ保護視察」を実施することにした。

ほうのき平7時55分発、畳平8時40分着のシャトルバスを利用。バスは2台、1号車は補助席を全数、2号車は補助席を1部使用。これだけの人数を道路占有面積最小で、定刻通りに運ぶことの出来る現行のシャトルバス運行システムは実に素晴らしい。

畳平ではひんやりした空気が軽く頬をなでる。早速、室堂ヶ原(標高約2,800m)にある東大宇宙線研究所乗鞍観測所の敷地内に設置されているケージを目指して出発。

途中ライチョウの姿は確認できなかったが、ウサギギク、コマクサ、イワギキョウ等の花々に吸い寄せられ、イワヒバリ、カヤクグリ等の影を追い求めながらも10時にはケージ設置域に到着。

ケージ設置域に中村先生と助手の方がおられた。我ら6名の来意を説明。先生からはライチョウ会議の高山での開催に対するお礼と我らの突然の来訪を歓迎するお言葉をいただいた。昨日(12日)2基のケージに保護していた2家族(母鳥2、ひな9)を無事放鳥することができた。今日は残る1基のケージに1家族(母鳥1、ひな6)が保護されているとの説明があった。

自然界ではひなは孵化後1ヶ月程の間に、キツネやカラスに襲われたり、悪天候による低温などで、生存率は3割程度となるが、今回のケージによる保護・飼育下では100%の生存率で、生存率の観点からでは大成功である。放鳥後のひなが親鳥と同じ大きさになる10月末頃まで追跡調査をする。今後はライチョウの生息数の減少が著しい南アルプス等へ今回の試みを展開し、生息数増に取り組むと力強く決意を述べられた。

1日3回程母子をケージの外に出し、ひなを遊ばせながら自然界へ返すための訓練が行われている。我ら6名のために、最後の1家族(母鳥1、ひな6)をケージから出していただいた。ひなは2回目の卵からの孵化であったため、生育が少し遅れていたが、明日(14日)は天候も良さそうなので、午後には放鳥したいとのこと。

ひなに母親の存在と行動範囲を教えているのか、母鳥は絶えず低い声を出していた。上空や岩場に目をやり天敵を警戒し、好奇心の塊となってコロコロと遊び回るひなを見守る母鳥の姿に感動。15分程遊んでから、母子は中村先生と助手に誘導されて、ケージに戻る。

ケージに入った母子は奥の餌皿に突進。母子が争うようにして餌(ミルワーム)を食べている。母鳥も天敵と我が子を見張る緊張から開放されたのであろう。ライチョウ母子の餌として、プラン



ターに植えたイワツメクサ等の高山植物や母鳥用のハイマツの種も用意されていた。

#### ■ 直井清正さんから中村先生へ情報提供

1. ミルワームのみを与えた場合、栄養バランスを崩し、目やにが出たり、足が立たなくなったりする。対策としてはキュウカンチョウ用の餌と組み合わせると効果的。但し、自然の餌を食べている現状では心配ないと思う。
2. 6月2日のライチョウ観察会（乗鞍岳）でビッコをひくような歩き方をするライチョウが観察された。他からも同様の情報が寄せられている。ビッコの原因確認をお願いした。



ライチョウ母子が自然界で逞しく生きて行くことと、中村先生の今後のご活躍を祈りつつ、約40分間のライチョウ母子との交流を終えてケージを後にした。（10時40分）

コロナ観測所に繋がる道端で、「不消ヶ池」の雪渓を眼下に見下ろしながら、昼の弁当を広げ、その後は、終わりに近付いている花畑を楽しんでから昼平を後にした。（斉藤義幸：文・写真）

《事務局より》 今回の「ケージ保護」は初めての実験・研究でしたので、中村先生が長期にわたり現地滞在中で、8月10日に連絡が取れ許可をいただきました。研究の進行状況（ライチョウの放鳥時期）により急な日程となり人数把握、現地状況を踏まえ昨年の参加者で希望されていた方などごく一部の方だけで行ないました。会員の皆さんに連絡できなかったことをお詫びします。

## 第14回 ライチョウ会議山梨大会

（参加無料）

期 日：11月3～4日 場所：山梨県南アルプス市（南アルプス櫛形生涯学習センター）

【日時】11月3日（日） 13：00～17：00 ワークショップ（研究発表・意見交換会）

11月4日（月） 9：00～12：00 ワークショップ（研究発表・意見交換会）

12：50～16：30 公開シンポジウム・パネルディスカッション

「ライチョウ 保護と高山環境の保全 ―新たな段階へ―」

※今大会ではケージ保護の実験・研究成果も動画・写真等で発表されます。

※懇親会・エクスカッションは事前申し込み。詳細・問い合わせ先 055-288-2125

☆今回のケージ保護の様子が中村先生のレポートで、雑誌『岳人 11月号』に掲載されています。

### 会員状況

平成25年10月末会員数 一般 94名, 団体 4

■ 会員を募集しています！ 年会費 = 個人 2,000円 家族 3,000円 団体 5,000円  
あなたの知人、友人に  
入会をおすすめください  
・ 郵便振替 00800-8-129365  
・ 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第54号（秋号） 平成25年11月1日 発行

発行者 乗鞍岳と飛驒の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町4-218-3 飯田 洋

TEL 0577-32-7206 ・ FAX 0577-32-7207

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者：宝田 延彦 E-mail: nobu1995@peach.ocn.ne.jp TEL(FAX 兼) 0577-34-1287

■ 編集者：住 寿美子 TEL 0577-34-7237

表紙写真提供：小池 潜